

□傘松隨筆 「一期一会」
村上市善福寺徒弟 細野徳彰

私が永平寺に来て今日までこうして修行を続けられているのには頑張っていられるのには理由があります。私は三月の二日に上山し、一週間の且過寮を終えて鐘洒に配役されました。お腹がすいたら食べる、普段の生活で普通にやっていたことが出来ない。睡眠時間が少なく頭がぼおっとするなかで毎日続く公務に、すぐに修行とはなんなのだろうと考えるようになりました。それでもなんとか今まで修行が続いているのは過去の経験と、絶対に僧侶になる約束があったからでした。

命を引き取るその日まで毎日顔を合わせに会いに行こうと決めました。その日から車で一時間かけて毎日通いました。三月十一日、病院にいつものように行こうとした時、強い地震が起きました。東日本大震災です。心配になり急いで病院に行くと、揺れが強かったせいで母の具合は悪くなり、ぐったりしていました。次の日から母の意識は無くなり昏睡状態になりました。意識がなくなる前の母との会話で、私が忘れることが出来ないのが、「私はあなたが無かぬ会社をおこしてお金持ちになつても嬉しくない。お金なんてギリギリでいいから人の支えになるお坊さんになってほしい」という言葉でした。今思えば母の最期の頼みであり願いであつたと思います。私の心から尊敬する母は、家にいる時は必ず位牌堂のお膳、四品十膳分を毎日作り、自分たちが食べる分は必ずお供えした後のご飯から手を付けていました。残りのお供えしたご飯は庭にいる生き物に与えており、改めて母の偉大さを感じると同時に、私には同じことが出来る気がしませんでした。そして彼

岸中の三月十一日に息を引き取りました。彼岸の中日ということもあり、母の最後を看取ることはできませんでしたが、寺の息子として生まれ肉親が彼岸仏になる、こんな有難いことはない、悲しさと共に、あまりに自然に寝ているように見える母の表情を見て涙が止まりませんでした。

この経験がどれだけ怒られても辛くとも、絶対に修行をやめない最大の理由です。

鐘洒から初めて転役した日は母の命日、三月二十一日でした。不思議な縁を頂いたなと思ひました。お施主様の法要を務めさせて頂く寮舎、祠堂殿に転役を知らされた時も、またそういった縁を頂いたんだと感じました。四か月ほど祠堂殿にいた中で私が一番僧侶をやつていてよかつたと感じたのは、奥殿焼香と呼ばれる、祠堂殿にお位牌を安置している方が永平寺に来られた際、私たちがお経を読む中、お位牌の前で焼香して頂く、その時に、お施主様に「お父さん、お母さん、永平寺でこんなに丁寧に供養して頂いてよかつたね」とお位牌に話しかけている姿を見て、僧侶とはなんて素晴ら

しいんだと思ひました。亡くなられた方だけでなく、残された方の気持ちの供養、これが大事なのだと教えられました。その後、二度目の鐘洒の後に大庫院で料理を学ばせて頂きました。そこで母が毎日作っていた仏様へのお膳を同じように作りました。その中で、今までは肉、魚を使えば美味しくなると思ひていましたが料理に大切なのはそういった材料ではなく、作る人の心だと言うことを教えられました。その他にも多くのことを学ばせて頂きましたが、それらの頂いた縁に少しでも報いることが出来るよう、誰かの力になれるよう、もっと精進してまいります。

*この一文は永平寺の機関誌 壱松「七月号」に掲載されたものです。お師匠様の忠行老師のこともよく存じていますし、亡き母を思う気持ちがとても良く表れており、読み始めたら涙がこみ上げて来ました。お母さんがとても大切にしていた一人息子でしたからしっかりと成長してほしいと願っていたに違いありません。徳彰さんは永平寺での修行三年目に入りました。

写経会 毎月(1月2月を除く)第2日曜 時間午後1時~随時(16時終了)都合付く時間にできます。